

# 戦争の記憶をつなぐ展示と歴史観

阿子島 香

## [東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行⑤]

2024年8月24日

### 講座要旨

今年度の館長講座も5回目となりました。ご来場いただき、有難うございます。「歴史博物館グローバル紀行」と題し、世界各地の博物館を、皆さんと一緒に巡っています。考古学と歴史を中心にして、海外のミュージアムを訪ね、各地の展示と郷土史を、世界史の視点から考えていきます。全8回の連続講座は、各回それぞれ独立した内容ですので、お楽しみください。今後の内容は、次のように予定しております。⑥南フランスの遙かなる先史時代、⑦ネイティブ・アメリカンの世界1、⑧ネイティブ・アメリカンの世界2。「博物館学」という研究分野があり、「学芸員資格」を取得する要件として多くの関連科目の履修があります。今年の館長講座は、いわば「博物館展示論」と、「世界史の散策」とのクロスオーバーと考えていただければ幸いです。お話の内容では、時々、旧シリーズすなわち「東北グローバル考古学」の全24回の内容と関連させつつ、参照しています。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館のHPにて、講座概要を公開しております(多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したものになっています)。あわせてご参照いただければうれしく存じます。

8月15日の終戦記念日、また原爆が投下された6日、9日の頃には、さまざまなメディアや市民活動で、「戦争」について考える企画が多くあります。国や自治体の行事も多くあります。日本社会で8月に戦争を考えることは定着してきています。そこで、館長講座でも取り上げることにしました。前回は太平洋海域への人類の進出、ポリネシアまで人類の生活圏となった歴史を振り返りました。今回は、ハワイ諸島の歴史(続編)と日系人、また1941年12月8日(アメリカでは7日)の「真珠湾攻撃」を対象にする博物館の展示を訪ねながら、人類にとっての戦争を考えてみましょう。アメリカの博物館では、日米の戦争をどのように展示しているのでしょうか。あまり身近にない話題でもありますので、ご参考になれば幸いです。

講座で取り上げる博物館をご紹介します。ビショップ博物館 Bishop Museum、前回に詳しく解説しました。陸軍博物館 Army Museum、ワイキキビーチの近くにあり、旧ランドルフ砲台要塞の跡地を軍事史に特化した博物館としています。真珠湾攻撃に関しても、実物資料、模型などで、詳細に解説しています。太平洋航空博物館(真珠湾航空博物館) Pacific Aviation Museum, Pearl Harbor、パールハーバーの中のフォード島にあり、広大

な敷地の規模で、旧格納庫を改装し、航空機の実機展示を中心としています。真珠湾ビクターセンター博物館（展示館） Pearl Harbor Visitor Center Exhibits、真珠湾攻撃に至る日米の歴史的背景と、12月7日の奇襲攻撃の実際を、分かりやすく展示している新館です。戦艦アリゾナ追悼記念館 USS Arizona Memorial、真珠湾攻撃で大爆発し沈没したままの戦艦を、そのままの状態で見せる施設で、慰霊と鎮魂の場でもあります。戦艦ミズーリ記念艦 USS Battleship Missouri Memorial、退役した戦艦を博物館として公開しています。特攻機の突入、日本降伏文書調印式の展示も、その現場にあります。

ハワイ諸島への西洋人到来は、1778年の英国軍人キャプテンクックの第3回探検が最初でした。その後ハワイは激動の歴史をたどりました。カメハメハ大王によるハワイ統一は1810年です。ハワイ王国は1893年に終焉を迎えて、1898年にはアメリカ合衆国に併合されました。1849年にハワイと米国は和親条約を締結し、捕鯨船が来航するようになりました。1884年にはアメリカ海軍はパールハーバーの使用権を得ました。ハワイ人の人口が減少する中で、サトウキビ栽培が本格化し、農場労働者として、日本人移民が増加しました。1868（明治元）年の最初の移民は「元年者」と呼ばれました。次第に日系人はハワイ社会で地位を確立し、1941年には、人口の約3分の1を占めるようになっていました。

帝国海軍機動部隊の航空隊による奇襲攻撃は、大きな被害と衝撃をもたらし、アメリカは第二次世界大戦に参戦しました。ルーズベルト大統領の演説が有名です。日系人は、敵性外国人という理由で、約12万人が強制収容所に送られました。カリフォルニア州のマンザナール収容所が代表的です。米本土では原則全員が対象とされましたが、ハワイでは約2千人が収監され、日系人のリーダー的な人々で、約1%でした。オアフ島のホノウリウリ収容所は、「地獄谷」と呼ばれました。

日系アメリカ人たちは、いわば「二つの祖国」の間にはありました。アメリカ合衆国に忠誠を尽くすため、軍の志願兵募集に応じて、「日系二世部隊」が組織されました。米本土の南部、ミシシッピ州のシェルビー基地で訓練を受けて、ヨーロッパ戦線で従軍しました。並み外れて勇猛果敢に戦って、多くの死傷者を出しましたが、大きな戦果をあげて、数々の勲章を授与されました。第442連隊戦闘団（442nd Regimental Combat Team）は、約4千名で、損害を出し交替していきました。Go for Broke 当たって砕けろ、の言葉は有名で、メダルや切手にもなりました。ダニエル・イノウエ少尉は、イタリア戦線で右腕を失う負傷をしながらも小隊を指揮し、英雄とされました。のちのハワイ州選出の民主党上院議員です（1924-2012）。ホノルル国際空港の名前になっています。陸軍博物館に、日系二世部隊の詳しい展示があります。

講座では、館長撮影の多くのスライドで、博物館の展示が実際にどのようなになっているか、どのような点に重点を置いているか、日本の博物館と違う点はどのようなところか、日米双方に対して、対象としての取り扱い方はどのようなになっているか、また展示の背景としての歴史哲学、戦争の考え方、アメリカ国民の一般的な認識、などを考えてみます。

今回講座の準備を通して、戦争はいかなる場合にも、絶対に行なってはならないという、

冒頭に述べた 8 月の各種企画で語られるメッセージを、改めて確認することになりました。

## トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、項目的にご紹介します。

・前回講座「遠洋航海者：太平洋の人々と文化」とのつながりで、ハワイ諸島への欧米人來航からの歴史と戦争に触れた。1778年に英国軍人キャプテンクックは、帆船レゾリューション号以下 2 隻で、ハワイ諸島に欧米人として初めて來航した。この時から激動の歴史が始まった。のちのカメハメハ大王はこの時 20 歳前後で、大きな影響を受けたと考えられている。キャプテンクックの 3 回目の探検航海であった。水・物資等の補給を行なってアメリカ北西航路の探検を行ない、翌 1779 年に再来航した。この頃のハワイ諸島は、統一王国ではなく、首長国が並立していた。ハワイ島、マウイ島とモロカイ島・ラナイ島、オアフ島、カウアイ島とニイハウ島などが分立していた（陸軍博物館展示、1775 年）。

・再来航したキャプテンクック一行は、極めて異例の歓待をもって、ハワイ島住民に迎えられた。当時の記録を分析した人類学者のマーシャル・サーリンズは、クック船長の神格化、深く信仰されていたカミ「ロノ神」が來訪したと解釈された可能性を指摘した（『歴史の島々』山本真鳥訳 1993）。サーリンズは、かつて「新進化主義人類学」の代表的研究者であり、ポリネシアの首長制社会の分析で著名であったが、のちに「構造主義的歴史人類学」へと学風を変えた。一旦出航したが帆船の帆柱破損により帰島し、そして先住民たちとの軋轢が深まり、クックは殺害された（ビショップ博物館の展示絵画を紹介）。

・18 世紀の戦いのようすを描いた絵画（ビショップ博物館）では、こん棒、槍、刀、それに「サメの歯を埋め込んだ武器」を相手にかざして戦闘を行なっている。戦士のマントとヘッドギアは伝統的な高位者の出で立ちで、希少な鳥の羽を集めて制作され、ステータスシンボル（地位と威信を示す）であった。代々のハワイ王族のマントなどは、展示されている。伝統的な戦いは、単に相手を殺傷することだけが目的というわけではなく、多分に戦いの儀礼的な象徴性がある。近代戦とは「戦争」の意味、性格が異なる。

・クックの時代の銃器は、「フリントロック式銃」の段階であった（展示紹介）。発射装置には、フリントという石材の部品を挟んで、鉄の部品に激突させる。火花を散らすと、導入火薬に点火して、爆発し弾丸が発射される。銃身にはらせん状の刻みがない「マスケット銃」（滑腔銃身）で、のちの「ライフル銃」の前の段階。フリントは石器時代にも利用されていた同じ石材で、銃器用の部品は「ガン・フリント」で、職人製作。欧米考古学では、旧石器の「石刃」と間違えないようにと教えられる。日本では 17 世紀初頭、火縄銃の時代に天下泰平の世、そして鎖国となり、幕末には欧米は雷管式ライフル銃の時代となっていたので、文化財としてはフリントロック式銃がほとんどないことは、特筆される。世界史上の大きな偶然であり、以前の講座（第 3 回、「様々なパリの顔とミュージアム」）でも説明した。戦国日本の統一は世界的に強大な軍事国家を生みだしていたが、その歴史の大転換であった。

・ハワイ諸島では、銃の導入によって、戦闘の形も、戦争の意味も、大きく変わった。儀礼や信仰と一体化していて、石投げベルトなどで戦っていた集団は、銃による「戦争」を行なうようになった。陸軍博物館で展示の絵画では、伝統的な服装（鳥の羽製の戦士装束）で銃を撃つ姿が描かれている。カメハメハ王の統一戦争も、このような状況と推察される。1795年にハワイ王国を建設し、1810年には全ハワイ諸島を統一した。カメハメハ大王は、一説に600丁の銃を入手していたという。

・ビショップ博物館の日系移民の展示から紹介。日本からの移民は、多くはサトウキビ栽培の労働者として、農業に従事した。カラカウア王の治世に、明治政府と協約が結ばれて、官約移民、ついで民間移民が移り住んだ。農場の日系移民のジオラマや、当時の日用品（下駄、草履ほか）、玩具、教材、人形などが、生活を偲ばせる。荷物に墨書で、福島県信夫郡松川村とある。

・「写真花嫁」(Picture Bride)の展示。アメリカ領になってから(1898)、移民法の規定に従って、結婚して移民許可を得るという方法が広まった。また、労働移民の人数的には、男性が圧倒的に多いという人口構成も背景にあった。写真花嫁に関して、「こんなはずでは・・・」という話も多かったという。

・日系移民の写真展示。1920年頃のオアフ島エワ農場。この頃、労働移民の排斥運動が、米国内で強くなった。特に日系移民に対して社会的圧力があつた。日本からの移民は減少し、また世代的には日系二世の時代に移っていった。

・日系人の社会は次第に発展して、日本語の新聞も発行された。展示は「布哇報知」(ハワイ報知新聞)。日本語の活版活字。創業者像。日系人たちの社会的結節点は、仏教寺院であった。各種職業に進出した。ジオラマはMUSA-SHIYA SHOTEN LTD (「ムサシヤ商店会社」)。英語での通常の学校教育と別に、日本語による補習校もあつた。子弟を日本本国に送って教育を受けさせる動きもあつた。

・農場労働者は、低賃金に抗議のデモを行なった。デモ隊のプラカード複製の展示。いくつかを訳してみる。「生活できる賃金を寄こせ」「一日77セントで、あなたは生きられますか?」「生活できる賃金が出れば、我々は直ちに仕事に戻る」「心から、ハワイの繁栄を願っている」「我々は、アメリカ人のように生活したいのだ」。当時の状況と気持ちが伝わってくるようだ。

・「真珠湾航空博物館について。Our Mission。私たちの使命は、第二次世界大戦のアメリカの航空戦場を保護・管理すること、そして、1941年12月7日に起きた、真珠湾攻撃と、後に続く太平洋地域での戦闘にまつわる遺物や、人々の物語、戦闘が与えた影響や反応を現在、そして未来に語り継ぐことにあります。当館で、歴史の一端に触れ、自由や平和について考えるきっかけになれば幸いです。」(以上原文のまま。同博物館公式HPの日本語版から引用。ハワイでの各団体や個人のHPには、日本語版も多くある。この「当館の使命」には、日本の博物館人としても、違和感はない)。このページの背景は、大爆発して沈没しつつある戦艦アリゾナである。アリゾナは、真珠湾の悲劇と屈辱の象徴的な存在であり続け

ている。

・真珠湾航空博物館は、真珠湾攻撃の時代から継続して使用されてきた海軍航空基地の格納庫 (Hangar) 二か所を、修復して、航空機の実物を展示している。日米戦争に限らず、さまざまな機種、時代について、実機で展示する。広大な面積の博物館である。格納庫のガラス窓には、今なお、日本軍機の攻撃による弾丸の跡が残っているという。真珠湾地区は、今もアメリカ太平洋艦隊の中心基地であり、訪問、入場にセキュリティ・チェックがある。カバン持ち込み不可など。

・冷戦時代についての実機展示。写真は、旧ソビエト連邦のミグ戦闘機 (Mig 15)。赤い星印マークのジェット機。見掛け上は、同時代米軍のノースアメリカン F 86 セイバー・ジェット戦闘機 (日本の航空自衛隊でも一時主力) に似ている。両機は朝鮮戦争で空中戦を戦った。

・実機展示の格納庫は、大規模レセプション会場としても使用されている。訪問時 (2013.9) に出会った「開館時間短縮」のサインに、Veteran 云々の掲示があった。退役軍人 (在郷軍人) 団体は、アメリカでは強大な力のある組織。写真はテーブルの準備状況。頭上には、実機展示。

・戦闘機展示の一例。日中戦争から太平洋戦争前期のアメリカ陸軍機、カーチス P40 ウォーホーク。エンジン部分にサメの歯形の塗装ラッピングがあるが、その上に目玉も。特徴的な塗装で、米国内では歴史的にかなり有名な、「フライング・タイガーズ」。中国戦線で、対日戦争 (抗日戦争) に、義勇隊として参戦していた「飛虎隊」 (Flying Tigers)。(館長注。ジョン・ウェイン主演の国策映画 (1942) もあった。日本軍 (Jap) は悪役の敵。日本未公開、DVD 入手可)。当時のアメリカと中華民国との友好関係を示す絵皿、中国の航空地図を展示。

・真珠湾航空博物館の友の会入会を勧める壁面大型サインの図案が、フライング・タイガースで、「入会しないで帰らないで下さい。本日入会すれば無料です。フロントデスクにどうぞ」(スライドで紹介)。私は、日中戦争 (1937-1945) の頃の歴史が、このような役割を持っていることに少し驚いた。2013年に、この部隊を顕彰しているという歴史観に注意したい。

・太平洋の南方戦線の展示。ゼロ戦とグラマンの実機。零式艦上戦闘機の隣に軍艦旗を展示。軍艦旗は、現在も海上自衛隊が使用。紀元 2600 年 (昭和 15 年) に制式採用になったので、ゼロ戦。その性能の説明が詳細。隣に出征兵士への「日の丸の寄せ書き」(武運長久、〇〇君) を展示。パリの博物館にもあったが、日の丸の寄せ書きは、欧米の博物館での展示の定番。日本に対するエキゾチックな雰囲気強調する、また心理的な不気味さをもたらすようである。

・グラマンは F4F ワイルドキャット戦闘機。椰子の木と南太平洋の風景。展示の歴史的設定には、ガダルカナル島の戦場、ソロモン群島の航空戦などを想定と推察。これら機体は、戦争そのものの歴史展示というよりも、航空博物館なので、航空機の解説に重点があるよう

だ。

・真珠湾ビジターセンター展示館（新館のモダンな展示手法）と、陸軍博物館（ややクラシックな展示手法）には、それぞれ真珠湾攻撃に至る歴史的背景、軍事史的な評価、両軍軍備の対比、そして真珠湾奇襲攻撃の当日の、時系列での状況などが、非常に詳細に展示解説されている。講座では、両館展示から抜粋して、どのように伝えているかを考察。スライド多数で論評。ここでは若干を紹介したい。

・（展示館）。真珠湾攻撃を受けて、ルーズベルト大統領は議会で演説し、アメリカ参戦を発表。大統領演説の草稿（複製）を展示。本人がどう推敲したかの形跡が、直筆で各単語まで知られる。パネル見出しは大きく、“A Date which will live in infamy”（この日付は、屈辱とともに記憶されるだろう）。（館長注。番組のフィルムなどで、この参戦演説が出る時は、ちょうどこの部分が切り取られることが多い。注意して聞くと、約6分間の演説中から、上記のフレーズ部分が出てくる。同じように、終戦の玉音放送では、「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び、……」とか、開戦の大本営発表では、「…帝国陸海軍は、…本八日未明、米英軍と戦闘状態に入れり」とか、歴史的シーンには象徴的な部分があり、メディアでは切り取られる。全体を見るのが重要です）。

・（展示館）1930年代の日本。軍国主義とエキゾチックな文化の捉え方が出ている。「大元帥陛下の巡察」などのVTR展示。近代的軍備と、カラカサ、キモノの女性などを並べる取り合わせ。「理解し難い国と文化だった」という歴史観の一端が見え隠れする。“Hirohito”（昭和天皇）、“Kamikaze”（特攻隊）などの単語も、標準英語の語彙化している。“Samurai”は日常英語の標準語彙化して久しいが、歴史学分野でも多くの語彙がある。“Harakiri”（切腹）など。（館長注。以前に講座で解説した人類学者ルース・ベネディクトの『菊と刀』1946を思い出す。）

・（展示館）VTR展示で、タッチパネル方式で、多くの人々の歴史的な証言を選択することができる。日米双方の市民、軍人たちが、真珠湾攻撃について、当時の状況を語る。いわば「語り部」であるが、視聴覚設備の展示で、語り部の皆さんが話すという、いわば時間が止まったような不思議な印象を受けた。なお、歴史的史料や証言では、しばしば“Jap”（ジャップ）と出てくる。これは日本人への蔑称であって、現在は使用されない（少なくとも公式には）が、当時の歴史的な表現として使われている。

・（米国立公文書館）公開アーカイブで、12月7日朝の緊急電報を紹介。“AIR RAID ON PEARL HARBOR X THIS IS NOT DRILL”。（「真珠湾が空襲されている。これは演習ではない」）。

・（防衛省防衛研究所）デジタル展示より、暗号電報受信票2点を紹介。「トラ・トラ・トラ」（ワレ奇襲に成功セリ）。「ニイタカヤマノボレー二〇八」ひとふたまるはち（真珠湾攻撃作戦実行セヨ、12月8日）。新高山は、台湾にある富士山より高い山。このような歴史的な史料も、簡単にネット上で閲覧できるようになりました。

・（展示館）「Tora Tora Tora」は、奇襲攻撃開始の瞬間を展示する大型復元画コーナーの見

出しにもなっていた。模型の九七艦攻（九七式艦上攻撃機、3名搭乗）が、停泊していた戦艦の列に、魚雷を投下したシーン。日曜日の朝、午前8時頃。真珠湾は水深12mと浅く、航空魚雷攻撃は不可能とされていたが、魚雷を改造した上で、超低空飛行の投下訓練を行なって、戦艦群を沈没させた解説。

・(陸軍博) 連合艦隊司令長官、山本五十六提督のパネル。見出しに「日本のあやまち」**Japan's Failure** とある。山本長官に対しては、日米ともに、共通した歴史的評価がある。戦艦を重視する「大艦巨砲主義」と、航空戦力を重視する考え方が、まだ両者対立していた1930年代に、いち早く航空部隊の重要性を認識して、日本の航空機動部隊を育てた提督という評価である。アメリカでの駐在武官経験もあり、米国の国力を良く認識していた。個人的には、対米戦争には反対の考えを持っていた。機動部隊旗艦「赤城」の模型、主力の航空機（零式艦上戦闘機、九七式艦上攻撃機、九九式艦上爆撃機）の模型説明。

・(展示館) **Age of the Battleship** 戦艦の時代。巨大戦艦と空母搭載の艦載機との軍事的優劣の歴史的展示。戦艦アリゾナの14インチ砲弾（36センチ砲）の実物大模型。アリゾナは、フォード島沿岸で内側に停泊していたので、魚雷攻撃は外側の工作艦に向いた。アリゾナは、九七艦攻の水平爆撃隊によって、大型800キロ徹甲爆弾（戦艦の装甲を貫く爆弾）が命中し、内部の弾薬庫に誘爆を起こし、大爆発して沈没した（写真展示）。

・アリゾナ記念館 **USS Arizona Memorial** は、慰霊と鎮魂、追悼の場所（2014年訪問時のスライドで紹介）。予約制で、ビジターセンターからボートに乗船して向かう。戦艦アリゾナは沈没したそのままの姿で、その水上に白色の記念館がある。戦艦ミズーリ号の記念博物館に隣接した位置。窓から海軍基地、海中に船体が見えて、当時を偲ぶ。現在も、沈んだ船体から、油のようなものが浮かんでくる（実際に見えた）。水面に旧砲塔の残骸も見える。慰霊堂には、戦死者名が刻まれた銘板がある。追悼の部屋には、ある種の厳粛な雰囲気があって、日本人一人で周囲の撮影は憚られる雰囲気（率直な感想。スライド無し）。ここで青年たちを中心に1177名が犠牲となった。涙を流して祈っている年配女性を目撃した。

・(陸軍博) 原爆投下についての歴史的評価の展示（スライド）。パネルを一部訳「圧倒的な力（見出し）。アメリカの作戦計画者達は、日本本土制圧による（米軍の）死傷者を、100万名と見積もった。しかし、1945年8月6日、B-29 エノラ・ゲイ号は広島を破壊する一つの爆弾を投下した。3日後、もう一つの爆弾が長崎に落下した。これはアメリカの力を示し、日本は無条件降伏を受け入れた。犠牲の多い侵攻作戦は不要となった。・・・後略」。陸軍博物館の展示であるということ割り引いて考えても、このような歴史観は、日本人の心では受け入れがたい。しかし、原爆は戦争を終わらせたという評価は、一般アメリカ人たちの心には、根強く存在している。私の在米経験中の多くの会話において、この歴史観は確かに広く共有されていた。背景には、原爆の悲惨さが、あまり伝わっていないという現実がある。

・(スミソニアン航空宇宙博物館 別館) エノラ・ゲイ号の実機が展示されている。復元修復が行われた際、1995年にスミソニアンは大規模な「原爆展」を企画した。詳細な展示計画が練られて、被爆の写真等も、日本から展示予定だった。しかし、退役軍人組織やアメリカ

カ議会関係者などの強い反対が起きて、この展示は中止に追い込まれた。博物館長は辞任した。

・今回講座の副題は、「真珠湾攻撃とハワイ日系人」としました。昭和16年12月8日に至る歴史と、その後の日系移民の歴史を含めて、やや長期的な考察を試みました。広大なポリネシアの遠洋航海者たちの文化圏、ハワイ先住民の世界に、欧米人が到来した時から、激動の新たな歴史が始まりました。ハワイ王国の統一、製糖産業、捕鯨船、疫病での人口減少、アメリカ海軍基地、日本からの移民の波、などを振り返りました。日米開戦となって、日系人は「二つの祖国」の狭間にありました。日系人強制収容所の存在は、アメリカの負の歴史です。二世部隊は欧州戦線で奮闘しました。また二世たちの受けた教育には大正から昭和戦前の日本式教育も含まれていました。

・戦争ということを改めて考えるために、歴史をたどり、実際に何がどのように起きたのか、客観的な事実を振り返ることは、いっそう重要になっていると考えます。冒頭に述べた、8月の様々な企画での、「戦争はいかなる場合も、絶対にダメです。いけません」という人道的メッセージを受け止めて、「戦争の記憶をつないでいくこと」の大切さを確認したいと思えます。政治的な話ではありません。過去に学び、将来につなぐということは、歴史学の使命でもあります。

(本稿は、講演スライドを踏まえ、館長講座での配布資料に補足したものです。)